袋井市総合教育会議　会議録（要旨）

会　議　名	令和６年度第１回総合教育会議
招 集 日 時	令和６年10月15日(火)午後１時30分
会 議 時 間	午後１時26分から午後３時01分まで（１時間35分）
場　　所	教育会館３階　ICT研修室
出　席　者	大場規之　　市長 鈴木一吉　　教育長 鈴木万里子　委員 大谷純應　　委員 溝口知秀　　委員 吉田陽子　　委員 （計：６人）
欠　席　者	無し
傍　聴　者	無し
当局出席者	石黒克明　　教育部長 小澤一則　　教育監 神田明治　　学校教育課長 中村悟史　　魅力ある部活動推進室長 平野晃一　　魅力ある部活動推進室指導主事 久保田直樹　魅力ある部活動推進室主任 大庭尚文　　生涯学習課長 大庭英男　　市民生活部長 川村佳典　　スポーツ政策課長 山本　浩　　教育企画課長 長谷川美徳　教育企画課参事兼教育総務係長 （計：11人）　　（合計：17人）
会議に付した事　　件	別紙「令和６年度　第１回袋井市総合教育会議次第」のとおり

令和６年度　第１回袋井市総合教育会議　次第

日時：令和６年 10 月 15 日（火）
午後１時 30 分
場所：教育会館ＩＣＴ研修室

１　開　会

２　市長あいさつ

３　議　事

(1)部活動の地域移行について

(2)「ワクワクする学校」づくりについて

４　閉　会

１　開会

●教育部長

時間前ですが皆さんお集りになりましたので、ただ今から令和６年度第１回の袋井市総合教育会議を開催させていただきます。私は今日司会を務めます教育部長の石黒です。この会議については、毎回闊達な御意見が交わされて時間がなくなるぐらいですので、今日はテーマが２つということですので、私からの司会の話ではなく内容に時間を取りたいと思いますのでよろしくお願いします。

２　会議録署名委員の指名

●教育部長

鈴木委員　と　溝口委員 を指名

３　市長あいさつ

●大場市長

みなさんこんにちは。それぞれお忙しい中、令和６年度の第１回総合教育会議にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。10月に入ってもう半ば15日ということでございますけれども、今年度も折り返し地点を過ぎました。今年度後半、行政的に言いますと後半戦しっかりとやらなければいけないと同時に、先月末９月議会が終了いたしまして閉会日に議決をいただいたのが昨年度の決算の御承認ということでありました。昨年度の決算の承認をいただいて、今年度は折り返し点に差し掛かって、そして今取り掛かろうとしているのが来年度の予算でありまして、行政的には今そんな動きがあり、これからいろいろと本格化しているところでございます。昨日までの３日間そういう中で袋井市では多くの町で祭典が開催されまして、教育委員の皆様方にも地域の祭典、また、子ども達のお祭りへの参加に関しまして、いろいろ御配慮や対応等いただいておりまして本当にありがとうございました。このお祭りはコロナ禍もあって行動制限がいろんな交流の中でいろんな制約が多い期間が長く続きましたけれども、いよいよ今回そうした制約がない昔に戻っての祭典がやっと開催できたという地域がほとんどでございました。私も袋井祭り、袋井北祭り、地元の宇刈の祭りに参加をさせていただきましたけれども、やはりこの袋井、袋井に限らないとは思いますけれども、祭典の人々の交流がいかに地域コミュニティを維持していく上で大切かということをある意味再確認をしたこの３日間でございました。そしてまた、子ども達がいろいろな祭典への関りをしてくれたことで、私達も久しぶりに多くの子ども達の遊び声や明るい掛け声で私達自身も励ましてもらったと私のみならず多くの大人達が感じたことと思います。そうした中で、教育委員の皆様方にはお祭りを通しての教育への取組み、また、注意事項等含めてですねいろいろ御配慮いただきましたこと、あらためて感謝申し上げる次第でございます。子ども達の今言いました復活したコミュニティの中で人間形成が行われていくわけでございますけれども、このお祭りも本当に先ほども申し上げましたけれども、大事な地域との関りの１つであると思っております。私自身もお祭りから多くの事を学んだり知ったりしてきた一人でありまして、秋の大事な行事が将来を担う子ども達にとって大事な人生経験の一つになろうかと思っています。これか

らもこの祭典が続くものと思いますので、教育委員の皆様方におかれましても、是非続いての御支援・御協力をお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

(1)　部活動の地域移行について

さて、本年度第１回目の総合教育会議ということでございますが、皆様御承知のとおり「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づく、市長と教育委員の皆さんが協力し、地域の教育に関する基本的な方針や重要な課題について協議する場ということで設けられている会議でございます。

本日の予定の２つのテーマに関し、屈託のない御意見をいただきながら、私も皆さんと議論を深めてまいりたいと考えております。

まず初めに部活動の地域移行について　というテーマで協議を行いたいと存じます。「地域移行」の名にありますとおり、学校活動の一環として取り組まれてきた部活動が、学校の枠を外れ、スポーツや文化芸術活動において、地域の人材や特徴を生かしながら、子ども達が様々な活動に取り組んでいくものであり、場合によっては異年齢との交流など、地域社会全体の活性化にも繋がることが期待されております。

このように期待される部分がある一方で、この実現のためには、長年、学校の教員による指導に頼ってきた歴史の長さ故の変革には、指導者の確保や使用する施設をどうするか、費用負担をどうするかなど、様々な課題がございまして、この課題の整理や解決が必要でございます。

現在これらについて、「部活動地域移行推進協議会」をはじめ、関係各位と協議を行っているところでございますが、教育委員の皆様には最終的には、本市の教育委員会で方向性を定め、市が一体となって推進していく立場でございますので、本市の重要な施策の１つとして、私も、教育委員の皆様と協議してまいりたいと考えておりますので、是非、忌憚のない御意見をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

次に、２つ目の議事についてですが、「ワクワクする学校づくり」についてであります。

このテーマは、教育委員の皆さんが切に望んだテーマであるとうかがっております。私自身、令和３年に市長に就任してから、これまで、合計６回の「総合教育会議」を開催してまいりました。

これまで　当市の教育施策全般にわたり、教育委員の皆様と私がじっくり意見交換をする機会があまり多くなかったということもございまして、当市の教育が将来にわたってより良いものになるように就任４年目を迎えた私の当市の未来の教育についての考え、また、教育委員の皆さんの未来の教育についての考えについて意見交換ができればと存じますので、よろしくお願いを申し上げます。

４　議事

(1) 部活動の地域移行について

●教育部長

今市長からありましたとおり、２つの議題をテーマとして進めていきますのでよろしくお願いします。早速内容に入ってまいりますが、ここからの進行は議長であります大場市長の方になりますのでよろしくお願いします。

●大場市長

それでは議事に入ります。協議は全ての説明が終わった後にまとめて行いたいと存じます。

初めに(1)の「部活動の地域移行について」というテーマについて事務局より説明をお願いします。

●魅力ある部活動推進室長

資料に基づき説明

●大場市長

それでは以上の説明で質問、御質問等何かありましたらよろしくお願いします。

● 溝口委員

今中村室長が頭になって皆さんをまとめてお話を進めていただいていますけれども、まだまだ長いスパンの話ではあるようですね。なかなか地域移行をすんなりと済ませるというわけにはいかないだろうなあというのは今まで聞いてきた話で推測をしているところです。そういう中で、子どもの居場所とそれから費用とかそういうところの支援についての話し合いを。確かに子どもさん達が学校を使えると良いのだろうなあと。そういう御家庭も増えていると思うので確かに居場所を作ってあげることはすごく必要です。例えば、学校の中で教室を振り分けて居させてあげたりとか、いろいろと考えられると思います。これはまだまだなかなか一筋縄でまとまる話ではないと思っています。もうちょっと大きいところで考えてみますと、今までの部活動を地域に移行するというだけではなくて、袋井市としてもこれはチャンスだと思っていまして、中学生の中には今まで部活動とかというそういう枠の中でしか活動ができなくて、それに入れない子とかがいる中で、いろんな知識だとか技能だとかを持っている子がいっぱいいると思うんです。野球じゃないし、ソフトボールではないし、バスケットボールじゃないし、他のところで何かすごく良いものを持っている子がいると思うので。逆に言うと、もっともっと大学で言うとサークル活動のようなハードルの低い集団のようなものを作れるような形。例えば、指導者がプロでなくても良いし、誰かついてもらえれば良いとか、指導者がいなくても何人集まれば良いとか、そんなのも是非考えてもらって。そういう中から素晴らしい子ども達を見つけて、できれば市としても支援をしてくれるような仕組みを子ども達のために作ってもらえたらうれしいなあと思っています。１つ、先日小学校を回っておりましたら、すごく高度な折り紙をやって学校に飾っていたりしている子がいます。まあ荒っぽい折り紙でしたけど、とはいえものすごく素晴らしい折り紙を作っている子がおりました。そういう子なんかもね、もしかしたら部活動では力が発揮でき

なくても、自分で才能がそういうところにあるかもしれない。そういう子を見つけて支援したり、居場所を与えたりという事がここからさらに広がっていければ良いなと。このロードマップに合わせた中で作っていっていただければと。袋井としての面白い動きができるのではないかなあと思っています。

●大場市長

居場所的な大学のサークルのような幅広い、場合によっては今までできなかったところに踏み込んだジャンルに子ども達が力を発揮できる場所になれば良いというお話もございましたけれども、他にいかがでしょうか。

●吉田委員

私の周りの保護者が不安に思っているというのがありまして、それをお伝えしたいと思います。１点目は、やはり経済的負担が今よりも大きくなるんじゃないかというふうに考えている親御さんが多くて、特に今でもユニフォーム代とかぎりぎり出している中で会費っていうのが更に上乗せされるっていうときついなあと感じている御家庭も多いみたいで、当然困窮世帯への支援はあると思うのですけれども、そこまでいかなくてもぎりぎりにやっている世帯にとっては、民間のクラブへの参加というのは二の足を踏んでしまうところもあるのではないかなあと感じてまして、困窮世帯までいかなくても、例えば第３子、第４子がいるような御家庭のお母さんが言っていたのは、お兄ちゃんの時代は部活だからあまりお金がかからなくて、部活も塾も両方させられたと。でも第３子になって地域移行をした場合、そっちにお金がかかると部活か塾かどっちかしか選ばない状況になる。それはとても悲しいことだというお話をしている方がいらっしゃって、その辺は市で何か支援をしてもらえたらなあと思っています。

もう１点は、先ほど溝口さんがおっしゃっていたように指導者がいなくても、そういうサークル活動があっても良いんじゃないかというお話があって、確かにそうなんですけど保護者からするとどうしても部活っていうイメージが強いと、指導者の資質っていうところはどうしても気になるところで、もし不適切な指導があったらどうしようかということを考えている保護者もいて、そういった事を感じた場合、ちゃんと教育委員会なり何なりの相談窓口っていうのがしっかり体制を整えていただけたらなあと。

もう１点、私個人的に思っているのが、民間クラブってなると今までの部活経験だと何となくみんな入るものから保護者からすると習い事感覚にちょっと近いものになってくるのかなあと思ってくるのですね。そうなった場合、経済的負担が増えて、もしかしたら家の負担も増える。そうなったら、じゃあそうなら活動をやめたって良いから家で勉強をしてよというような御家庭も増えてくるんじゃないかと感じていまして、そうなるとせっかく袋井市は日本一の健康文化都市を掲げている中で、中学生がスポーツとか文化的な活動に携わるチャンスが少なくなってしまうんじゃないのかなあという事を危惧していまして、できれば市民全体だったり、家庭で何か部活を地域に移行するんじゃなくて、地域で子育てをするんだと。地域でも中学生を支援するという、そういった意識を醸成する必要があるかなあと思っています。

●大場市長

今３点話が出されました。不安としてまず経済的なもの、２点目として、指導者に対する資質を含めてということ、そしてまた、習い事との兼ね合いであったり、どちらしか選べなくなるかもしれないといったところに対する不安、及び、地域としてですね、スポーツを通した体力減少化、若しくは、文化度の低下といった事が起こりえないかという、その辺りのどれも不安ですけど、これまでいろいろアンケートを取ったり、いろいろな調査をしていただく中で、教育委員会の方で他に出た意見とか、今のところ何か考えとして持っているような事とか、その辺りのものがあれば教えていただきたいと思いますがどうでしょうか。

●魅力ある部活動推進室長

経済的な部分ですと、やはり先ほど出た放課後の居場所、お金がそれほどかからない、あるいは、安価な中でやれるような、あるいはさっき溝口さんがおっしゃっていたのですけど、何か体験ができるようなところで先ほど３つ目にお話させていただきましたような放課後の活動、ああいったものを残していかないといけないのかなと思っています。近隣の市町と話をしていく中で、ああいった活動を残してやっていく必要があると考えているのは袋井市だけかなというような事を私達は考えています。

指導者につきましては、やはりこれは不安になっている部分が我々も耳にしていますので、それだからこそ、先ほど言った登録クラブ、仮称エフ活ですね、あのところにも登録するにあたっては部活動の意義や役割を、しっかり理解していただける団体を登録していこうということで、ハードルを設けているところであります。我々も全てのところをオッケーというわけではなく、しっかりといくつかのハードルを作って、それをクリアしたところはオッケーですと。そういうところについては、中学校に紹介していきたいと。ここのクラブについては大丈夫ですよと、登録クラブですよという事で中学校の方には紹介していきたいと考えております。

兼ね合いの方につきましては、ここはちょっと難しいところがある。お金の事もありますので、なかなか難しいところがありますが、どうやって家庭が選択していくかっていう事もありますし、それから、クラブの運営費っていったところにつきましては、クラブの設立してくれた地域の団体が決めるところなので、そこは自走していけるような形で設定をしていく事を想定していますので、なかなかクラブによってはいろいろ値段設定も出てくるのかなあとなるので、ものによってはそういうところを選択できるよう形になると良いかなあと。１つしかないとなかなか難しいと思いますけど。種目によっては、２つや３つとか地域で創れると良いかなあと思っています。

●大場市長

私の方から補足と言いますか、コメントさせていただきます。

まず１点目というか、３点目についての補足なんですけれども、まず１点目ですね。

文化度や、子ども達の体力低下、そういったところの心配なんですけれども、名前がですね部活動の地域連携移行についてっていう今ネーミングで取り組みがされています。これ例えば、表現がですね、部活動の民間移行とかそういう言葉が使われていない、敢えて

地域移行、地域連携と書かれているのは、やはり民間に移行するのではなくて、地域が関わって子ども達を地域がある意味社会教育活動的な視点を含めながら、地域でいろいろ指導したり育てたりしていこうよと、いきたいよねという思いがそこに込められているからこそ、こういうネーミングが使われているという事を一つ御理解いただけると良いかなあと思っています。ただそれが現実的に、無償ではなかなか大変だよとか、指導者がやっぱり今年一年は良いけど次の年からは確保できるかどうかわからないであるとかですね、いろいろなそこにもハードルがあることも事実です。とは言え、思いとしては、地域でいろいろな文化的、スポーツ面、そういった力を持っている、思いを持っている人達が、子ども達に関わりながら、祭りではありませんですけれども、教育的側面を含めて子ども達の育ちに関わっていって欲しいということがまずそこにあるということはまず御理解いただけると良いかなあと思っています。そしてまた、費用面も含めてなんですけれども、私は執行部側というか市長部局ですので、関われる部分、関われない部分がありますけれども、教育委員会にお願いをしてきたのが、まずは十把一絡げでですね、何か新しい器を用意して、はいじゃあこういうものを新しい部活動でない民間的な組織であったり、活動を準備したりしましたので、はいこの良いところを選んでくださいみたいな、まとまって器を作ったところへ振り分けるみたいな、そういう形はできればとって欲しくない。子ども達一人一人、また、家庭一軒一軒の、若しくは、保護者お一人お一人のいろいろなお考えがあると思いますので、そうした状況を一つ一つ見ながら、その子に合った受け皿、この子にはどういう受け皿があるとかいう。例えば、同じバレーボールにしても、こっちのクラブとあっちのクラブとどう違うのかとか、本当にトップを目指すクラブがあればと思えば、逆に楽しむだけで良いよねえというクラブも出てくる可能性もあります。そうした、一つ一つを子ども達や親達が自分達の考えによって選んでいける。そうしたある意味個別対応的な非常に難しさや手間もかかりますけれども、誰一人取り残されるようなことがないような居場所作りというお話もありましたけれども、そんな個別対応をしていく中で、この民間の力を借りるという事も含めて、部活動の地域移行、地域連携が成り立っていくようにお願いをしてきたところでありまして、今聞いていただいておわかりになったかと思いますけれども、教育委員会としてもそうした私達の市長部局側の思いもですね聞いていただいて、受け皿をただ用意するだけではなくて、一つ一つ、一人一人の思いを大事にしながら、部活動をしようという活動をしていてくれると私は思っていました。その辺りの事も御評価いただけるとありがたいなあと思います。そうした中で、今挙げていただいた３つの課題が良い形で解決していったら良いなあと思っています。経済的な部分もですね、やはりトップを目指す子達は、若干お金がかかることも御容赦いただかなければいけないかもしれないし、ある意味時間を過ごすために、若しくは、楽しみを増やすためにスポーツをするのであればできるだけお金がかからない中から選べるような状況を作るとか、そんな形でトータルで解決していけると良いなあと思っています。そこにはいろいろな地域の皆さんのお力添えとか、保護者の皆さんの御理解とか、そういったものをお願いしたいというのが一つと。あともう一つ保護者の皆さんにも地域の皆さんにも、若しくは、その活動に加わる御本人にも御理解いただけるとありがたいと思うのが、新しくできた受け皿にですね、一度スタートしたのだから２年目も10年目も確実にできる体制をしっかりしたものを用意してよねという、あんまり高いものを要求してしまうとなかなかスタ

ートが難しいので、今年はこういう形で活動するというけど来年はちょっと保障できませんみたいなそういう皆さんも中にはいると思うんです、受け皿として。そういったものにもできればある意味温かく受け皿として迎えていただいて、そうした活動もあると。その代わり活動費もそんなにかからないしという、そういう許容力を是非持っていただいて、地域全体でこの活動を支えていただければありがたいなあと思うところでございます。

●大谷委員

私も今実は、市長がおっしゃられた事に大いに賛同します。そもそもこれは国の考えがあまりよく考えられていないと、これは困るなと思っているところがあります。実はこれはシステムの変革ではなくて、実はこれ価値観とか考え方の大きな変革であって。実は、ここにいる我々皆さん中学生の時何か部活動に所属していたのですけれども、そもそも部活って我々の頃っていうのは当然そういういう事っていうのは書かれていませんでした。暗黙の了解の中でおそらくは学校としては学校教育の一環とか延長線上の中で、もちろん体力とか技能を身に着けさせるっていうのもあるのでしょうが、少なくとも何故かスポーツとか運動部について結構話が終始しているっていうのは、我々が実はそういう価値観の中にいるからであって、実はそういうところに所属することによって、例えば集団で規律を守って行動するとか、あるいは目標をみんなで協力してといったところのいわゆるそういう部分の社会性の寛容というのが部活の中には大きくあって求められている。そういうところがクローズアップされている部分があって。だからできるだけ、運動部にちゃんと所属してみんなで頑張りなさいというところがあったんですよ。そこはおそらくこれからの中でコミットされていかないでしょうけれども、かなり軽視されていく。その代わり、例えば子ども達の自主性とか多様性とかというものを重んじるっていう事になるのであれば、先ほど市長がおっしゃられたとおりで、子ども達がいろんなものとか、あるいは選択していく中で、今までどおり部活、例えば野球部だったらこれだけお金かかりますよ、サッカー部だったらこれだけお金がかかりますよという中で、当然トップアスリートとは言いませんが、ジュニアアスリートとかそれが社会人になるだろうが学生の状況など別なんですけれども、ちゃんとアスリートとしての道を目指していくのであれば、やっぱり当然能力と同時にある程度の一定以上の負担っていうのは、家庭が子ども達がやりたい事をするためには必ず家庭がある程度はもちろん一定までの機会の均等は必要と思いますが、ただそれ以上に関して言えば、そこは子ども達がやりたい事と同時にやれる事を考えた時に、どうしてもやらせたいのだったら、そこはある程度の家庭が負担していかなければいけないと思っています。だから、絶対に野球部に所属しなければいけないとか、絶対にサッカー部に所属しなければいけないとかいう考え方、価値観の変換のもう一方として、実は様々な楽しいものとか、自分達が選べばこんないろいろなものがありますよというところがちゃんと醸成をされていかないとさっき言ったみたいに、不安が解消されたりとか、あるいは私の家はこれしか経済状態が無いのに、あの家はこれだけ経済の状態だからとうちの子はやらせてあげられないという不平等感とかというのは、おそらく僕は解決していかないのではないのか。それを考えると今言ったように、システムの改革ではなくて、実は考え方をお子さんだけでなくて保護者とか市民とかが、理解をしてもらった上で、なぜ地域に部活動が移行していくのかっていう事をちゃんと理解していただくだけの事をして

いかなければいけないのかなあと。だから、頑張ってやりたくてトップアスリートを目指す人達はそういうクラブ、例えばいろいろ民間にもあるでしょうけれども、そっちで頑張ってと。でもその代わり、ある程度の当然頑張らなければいけない練習時間とかいろんな時間が取られます。お金も取られます。様々なものが犠牲にされなければいけないからそこを目指す方達と、じゃあ自分達はそうではないからもっともう少し柔らかい形で、もう少し楽しい形でやる代わりに、そこまでで大会はないですから、遠征はありません。そこまでのすごいユニフォームが無くてもできますとか。あるいは、スポーツで無くても、もっと実は楽しめるとか、もっと実は生き生きと自分達の学生生活を謳歌できるものがあるっていうところを私は作っていきながら、そっちもありますよとか、いやそれも子ども達にとってはとても幸せなところですよという価値観の変換をやっぱり市民全体に我々が醸成していかないとこの問題っていうのはおそらくさっき言った、いわゆる不満か公平感とか言うのはどうやっても解決していかないのではないのかと。それぐらい実は国がやろうとしている事っていうのは割と拙速で、そこをどうするのかというのをいつも思うのですけれども。少なくとも、袋井市に関してはそこってもうちょっと市が積極的に、こんないろいろ楽しい選択肢がこれから増えますよという言い方をしていった方が良いのではないかと先ほどの市長の話を聴いて思いました。

●大場市長

やらなきゃいけないから移行していきますという事ではなくて、逆にこの機会を良い形に、新しい価値観で子ども達に向かう、スポーツに接していってもらう。文化、スポーツのみならず、社会活動を含めていろいろと関りを創っていく。ある意味新しい社会教育の場みたいなものを創っていく事も一つ形なのではないかと。そういう部分を含んでのお言葉だったと思います。スタートは教員の負担軽減というところから、ある意味働き方改革のようなところからこの議論がスタートしていることによる、もう切羽詰まったところでこの対応を迫られているという、我が国の教員へある意味本当に御負担をお掛けしてきた部分をずっと補正する社会として補正する一つの活動なんだろうなと思います。いろいろな課題もそこにはあるわけですけれども、いろいろな見方でせっかくの案、これをポジティブに対応しながら、袋井の子ども達が様々な可能性をそこから見出してくれると良いなあと思いながら、お話を伺っておりました。

●鈴木委員

正直いろいろと考えていてわからなくなっていたんですよね。部活動の地域移行って何だろうと。先ほど市長さんが、民間移行ではないんだという話があったと思うのですが。子ども達の多様な地域の中に居場所を作るというような事かなあと。今まで学校の教育活動としてやってきた部活動がなくなった時に何が困るかと考えていった時に、部活動で生徒指導的な部分、集団活動的な部分っていう事をしていた部分もあるし、後は体力面とか文化的な面を伸ばすという事。そうすると、その自分がトップアスリートを目指すっていたらやっぱりそれは民間の優れた指導者、本格的なものを。この夏ちょっとトップのピアニストに教わっているのを観たが、やっぱり違うんですよね。指導者によって伸びていく。その指導っていうのがすごい。やっぱり、そういう子ども達って、部活動入る時野球

の選手になりたいとか、サッカー選手になりたいとか思う子もいる。その子達は、そういう面で伸ばしていくトップ指導者がいるようなところでやることが望ましい。そうではなくて、今まで集団的なものを創り、やってきた子に対しては、地域の中にいろんな居場所を作ってあげるという。それがもう学校とは関わりが無い中で、地域の中にそういうような取り組みが、自然と市民活動のような中でできていくっていうのが、理想なのではないかなあって思うんです。ただ、実際に今のままで地域に移行したとして、そういう取り組みが果たしてできるかというと、高齢者が多い。今コミセンなんかの活動は、本当に高齢者なんですよね。そうではなくて、働き盛りの世代がそういうものに参加できるようなある意味社会の変革、例えば、市役所の職員が水曜日の午後はそういう地域クラブみたいなものを創って、そこで子ども達の指導をするよというような、そういう働き方の改革を含めたシステムの変革をしていかないといけないだろうし。そこはもう安価なところで。でも、経済的にはうまくいかない、うちの経済考えたらとてもそういう民間クラブで自分の力を伸ばすことができない。だけど、ある面そういうところで伸ばしていきたい、野球選手になりたいとか、サッカー選手になりたいとかいう子達を補助する、支援など。そういうような行政的な支援かもしれないし、民間に働きかけて支援するとか、そういう支援制度を作ってとか。袋井市ならではのそういう子ども達の受け皿作りというのをやったらどうかなと。ただ学校はどうなるのかなあと。部活動、学校外の活動は任せるし、学校の中でできる今までやっていた部活動で担っていた生徒指導的な部分とか、体験活動的な部分はやっていく。学校教育の中できちんとやっていくという事が必要かと。いろいろ見てきて、わかりにくくなっている。

●大場市長

今日の会議はですね、何か結論を出すとか、ＡかＢかっていう判断をお願いするという事ではなくて、まだ地域移行そのものがスタートしたばかりということもありまして、自由に御意見をいただきながら担当の方としてもプロジェクトを進めるにあたって、いろいろな意見を参考にさせていただきたいという事での会議なので、自由に御意見を言っていただいて、今鈴木委員が言っていただいたようないろいろなわかりにくさ、理解のしにくさ、またこれどうなっていっちゃうんだろうみたいな個人的な思いとかいろいろあると思うんですね。極端な事を言うと、これはある意味一つ社会の課題でもあると思っていて、難しいものをたくさんはらんでおりますけれども、是非こういった場で御意見を言っていただいておりますけれども、また、今後に引き続いてもいろいろな批判や御意見をいただきながら良い形でこのプロジェクトを進めていかないといけないとあらためて今思いました。そしてまた実はですね、袋井市だけの問題ではなくて、袋井市の子ども達、じゃあ袋井の登録クラブになったから、袋井市の子ども達だけがそこに来るのかというと実はそうじゃなくて、掛川から袋井市の登録クラブに来る場合もあるでしょうし、袋井の子ども達が掛川や磐田のクラブへ参加する場合もあるでしょうし。なので今単独の市での対応に御意見をいただいていますけれども、子ども達のこういう活動にある意味行政境はないと思っておりまして、その辺りも含めて御意見をいただきたいなあと。例えば、もう既にいろいろな地域の子ども達が活動している一つとして、袋井陸上クラブっていうのがあります。スポ協などの支援を受けながら活動をしているのですけれども、その中には掛川の生

徒さんが袋井の陸上クラブに入っていますし、逆に袋井市の生徒が同じ陸上で他の市のチームに所属している事もあるようです。そういった事も含めて、いろいろな御意見をいただきたいと思います。今日話には出ていませんけれども、まだまだ本当に課題はたくさんあって、例えば、吹奏楽とか楽器は学校へ置いておけるのかとか、その楽器は今後故障したら誰が修理をするのかとか、新たな問題がどういうふうに購入していけば良いのだろうとか、そういうのを考えるとクラブの存続を、楽器の所属や活動の存続までどうなっちゃうのだろうかみたいな不安もそこにはついて回って、本当にまだ見えない不測な事が起こりうる状況であります。とは言え、私達実は今日もいろんなところで話したのですが、人口減少社会に入っていって、百年間かけて過去に六千万人の人口が一億二千万人になってまだ日本の人口一億二千万人を超えています。これもまた同じように百年かけて六千万人に減っていくと。同じ増えた分だけ急激に減少していくという新たな日本の人口減少局面に入るわけで、それももう本当にお手本の無い手探りの社会にこれから私達が対応していく。この部活動の移行もお手本の無い、誰もこれまでこの移行に関わったことが無い未知の世界ですので、それこそ本当に委員が言われたような我々の時代の価値観であったり、思いであったり、そこにある成果であったり、そういったものにとらわれていないような、しっかりと地に足を付けながらやらないといけないと思っています。ですので、多くの議論をしながら手探りではありますけれども、子ども達のために何が良いのだろうという事をしっかり考えていかないというふうに考えております。難しさはありますけれども、よろしくお願いします。

●大谷委員

多分それぞれの地域に則した、もしかしたらこれは、袋井南中学校だけに当てはまることかもしれないですけれども、実は高校と中学でそういう事やっていますという。犬山市さん、城下町ですが、半田市なんかもそうなんですが、いわゆるお祭りの時などの人形からくりなどが盛んな地域なんですけれども、実は地域の保存会がやっていて、結構高校のとかその下に中学の子ども達がいて、日曜日とか放課後に、あそこにあるからくり館とかでやっていて、時間がある時は練習を兼ねて上演もしてくれたりして。うちの方の切実な問題として、今年市の教育委員会の皆さんに御協力をいただく中で、法多山の田遊祭が国の重要無形民俗文化財になったんですけれども、実はこれは、どこも無形民俗文化財っていうのは文化の継承というのが非常に大きな課題があって、もう実は舞手があまりいないんですよね。特に一番中学生位の若い子達が入ってすぐ「そうとめ」という要するに田植えの時に踊る。細かい話をすると、東と西で５人ずつ「そうとめ」というのが必ずいないといけないのですが、子どもがいなくて成人の若い人もいないので、ここ数年はずっと４人とかしか揃わないんですよ。おそらくそういうところがですね、文化の継承とか保存に興味がある子達がいたら、そこのところのマッチングっていうのをしていただけると。もしかしたら、南中学校の子達だけでも良いのかもしれません。それが５人とか10人のクラブでも良いのですけれども。じゃあそういう事に興味があってやりたいという子達がいて、それが実はそういう事だけではなくて、いくつかいろんなものがあったところのマッチングをしっかり。子ども達を預けて良いものと悪いものとあるかもしれないですけど。そこら辺の取捨選択も含めて、マッチングっていうのは私は地域特性っていうのがあって

も良いのかなあと。その一方でさっき吹奏楽の話をしていましたが、今まで当たり前のように場所があって楽器があって指導してくださる方があって、どこの学校にもある事が当たり前の時代だった。おそらくそれがもしかしたら、だんだん発想の転換などで、地域に１個あれば良いとかなる可能性があるんですよね。だから楽器はみんな１つで済んじゃうでしょって形になるかも。なんなら、どうしても自分達はそこの吹奏楽の楽器を極めたいっていうと言えば、さっきのトップアスリートと同じように、やっぱりそこの負担っていうのはやっていかないといけない。でも音楽の楽しみっていうのは、いろんな楽しみがあるので、お祭りの笛を習いたい子がいたら笛を習えば良いと僕は思う。もしそれができるのであればおそらくその地域移行のメリットではないかと。その辺りの地域性に則したマッチングを是非袋井はより一歩進んだ形でやっていただけると、先進的な地域移行ができるのではないかと。

●鈴木委員

私も全く同じように思います。これから考えていくのを、もっともっと今の中学校の部活に無い範囲で対応していく、複合的にっていうのが。昔は木原の大念仏は小学校のクラブ活動でやった事がある。それを残していきたいという事で、地域の人達と一緒に動いていた事もあるんですが。あと、自分はできないけどサポートしたいと。音楽はできないけど音楽をプロデュースする、舞台的にそういうものを支援するのをやりたいとか。本当に多様にどれかに取り組んでいく。そうすると、提案の中にあった放課後自主活動の設定を学校がしなくても、子どもが地域の中でいろんな活動の中で選択できるような方が良いのかなあと思って。学校が関わっていくとまたそこに新たな関り方が必要になってくるかなあと。いろんな受け皿を創っていくというのが良いなあと思っています。

●吉田委員

今ある部活動の活動にとらわれない活動も必要というお話の中で、例えばなんですが、今小学校でやっている放課後こども教室っていうのがいくつか開催されていて、そこは今小学生しか参加できないんですけど、中学生も参加できる。なんだったら中学生が企画運営するとか。あとは南の丘学園だったら、袋井市の特別支援学校と交流するクラブを創ったらどうかとか、いろいろ今ある活動にプラスすればできることもあるんじゃないかなあと。

●大場市長

事務局として、これまでの話を受けてどうですか。

●教育部長

今委員の方々がおっしゃったように、どうしても中学校の部活は学校の教科にある例えばスポーツにしてみても、それを放課後にやるというものがほとんどなのですが、地域を見ますと、例えばサーフィンやったりスノーボードやったりだとか、お父さんの影響があって、お母さんの影響があってとかいう形で全国大会に出られたりしているのですが。

様々そうやって地域にいろいろある、例えば、大谷委員が言われたように、横須賀高校なんかは祭囃子が高校であったりするとか、そういう例なのかなあと思ったりして今お聴きしたのですが。先日掛川は農業部活、農業クラブみたいのを立ち上げるよという話があったのですが、袋井市でクラウンメロンクラブみたいなのが立ち上がってですね、将来的にその中で日本一のメロンを作りたいという子が出てくるっていうのも袋井市らしいですし。今回のこの地域移行という先ほど市長からもありましたとおり、多様性と言いましょうか、いろいろな子達の選択肢が増えるというのも一つのチャンスだと思いますので、そのためには、教育委員会だけではなくて市長部局のスポーツですとか、文化だけではなくて、環境ですとか、農業ですとか様々ないろんな部署がその担い手の玄関を持っているかと思うのですね。我々今まで教育委員会でやっておりましたが、これを機にどんどんいろんな分野に広げていく中で、子ども達の受け皿を作りたいと思っていますし、先ほど、放課後活動という形で紹介させていただいたのが、吉田委員がおっしゃっていただいた放課後子ども教室、あれに似た活動かなあと思いますが、月に２日か３日位放課後児童クラブとは別に地域の方々がコーディネーターをして、その方がグランドゴルフを教えてくれたりですとか、その方々が持っている特技を教えてくれたりとか、時には市から派遣をして特別な講師の方に特殊な技術を教えてもらおうという事で放課後の時間を少しエンジョイしながらやっていこうと、様々な部活動の移行に一番最初からは全ての受け皿ができないでしょうが、冒頭担当が説明したように子ども達がエンジョイをしたいという方達については、そうした月に２、３回の放課後活動というものも袋井市独自のものとして創った中で、受け皿を充実させていこうという考えですので、市長からも言っていただいたとおり、まだまだ議論が必要な部分がありますので、今日いただいた意見も参考にしながら事務局としては子どもたちの居場所づくりをしていきたいと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

●教育長

そもそも部活動の地域移行が出たのが、ある意味働き方改革を国が出してきたので少しある意味邪道かなあとすごく思いました。国に対して不満なのは、現場任せですよね、現場ですり合わせをしてあんた達自由にやりなさいよという話になっていて。地域によって全然事情が違うので、私共袋井市とそれじゃあ他の自治体と同じようにできるかというと全く違う環境になっているところ、ある意味現場の方でそういったすり合わせをしなければならないという事の混乱さ、みたいなところはちょっと不満に思っていました。先ほど言ったとおり、ピンチはチャンスなのでこれをどうやってチャンスに変えようかなというところを考えていかなければいけないかなあと思っています。そういった意味で言えば、学校の先生方の負担を軽くするというのは当然ですけれども、子ども達により選択肢が増えるような形を増やしたいというのが一つと、その事によって地域振興に繋がると良い、まちづくりに繋がると良いなと。スポーツやる人達がすごい受け皿ができます。文化の受け皿ができますみたいな形に少しでも繋がると良いなと思っているので、そういうふうにやっていきたいという事と。あと放課後活動と言ったのは、実は他の自治体には無いと説明しましたけれども、事務局の方で考えて、教育の場では既存の部活動からちゃんとやっていきましょうというところを事務局の方で、放課後活動というのはやはり創りましょう

と。つまり、レクレーション志向の子もいるのでその子達の選択肢もちゃんと創りましょうねといったところが出てきたので、事務局は偉いなあと思っています。そういった面の中では、鈴木委員が言ったように、放課後活動は申し訳ないけれども学校ではイニシアティブはとりません。地域とか、子ども達とかにイニシアティブをとらせてそこを大切にしながら、子ども達の選択肢も増やしながらという事ですけれども、課題はまだまだあると思います。地域へ行くとどうしてもビジネスベースにならないとなかなか続かないというところもありますので、そことのせめぎ合いはどうしてもありますけれども、行政の支援とビジネスベースという事と、私達がどうやってバランスをとっていくかというところが大きな課題かなあと思っています。いろいろな議論をさせていただきたいと思います。

●溝口委員

今までの部活動と違うのは何かと考えたら、学校の先生が好きでやっている先生もいるし、嫌々やっていた先生もいるんですけれども、ちゃんと先生が責任を持ってみてくれていたというところが大きかった。それが今度は地域移行、あるいは、幅をもう少し広げてそれを本当にできる人を選ばないといけないっていうこちらの立場と、ではそれでは広がらないというところがあるので、是非そこだけうまい方策を見つけていきたいなあと思っています。

●大谷委員

安全性の確保の話をしていないで、今日は夢の部分の話をしてきた。そういう意味では、クリアしないといけない一番大きな問題の子ども達の安全性というのはどういうふうにちゃんと確保していくのかと言ったら、そこは言い始めたら全ての問題が上へ上がってこなくなってしまうので、本当にいろいろ難しい問題がたくさんあると思うので、重ねて市長も教育長も言いましたが、これからも重ねて議論をしていく必要があるのかもしれませんね。

●大場市長

先ほど大谷委員が言われた田遊びの話に本当に代表されると思いますけれども、やっぱり様々な文化活動、地域活動が後継者がいないっていう事で大きな地域課題となっています。そこに、大谷委員が言われたように、場合によっては、後継者になる可能性がある子ども達が最初は興味半分でも良いと思います。そうした子ども達の活動に参加していく。この地域移行がプラスに働くとなれば、我々の抱える大きな課題がそこで一気に両方解決されて、素晴らしい解決策になっていくと思うので、そうした教育長が先ほど補足していただいたピンチはチャンスではないですけれども、課題を良い方向に解決できるようなそんな今回の移行プロジェクトになれば良いなあと思っております。まだまだ本当に皆さんの御意見をいただきながら、進めていくものでありますので、引き続きどうぞよろしくお願いをしたいと思います。今日はありがとうございました。

⑵「ワクワクする学校」づくりについて

●大場市長
　次に、「ワクワクする学校」づくりについて、フリートーク形式で教育委員の皆様と意見交換を行いたいと思いますので、よろしくお願いします。
　「ワクワクする学校」とはみたいなところで議論になるかもしれません。正直私は学校が好きではなくて、給食も嫌いだった。唯一休み時間にドッチボールをするとか、そういう事にしか楽しみが見いだせなくて、いろいろな活動や体を動かす事は好きでしたが、学校はなかなかワクワクはなかったので、難しさがあります。どうしたらワクワクするのでしょうか。

●吉田委員
　市長は、どういう学校だったらワクワクすると思いますか。

●大場市長
　まずテストがあるのが嫌いだった。それと、嫌いな給食があって、給食を残して、放課後までずっと残されて。給食のメニューが月に１回配られると嫌いなものがあって、それを考えただけで学校へ行くのが嫌になっちゃって。というのが２大嫌トピックですね。中学になって２つ目の課題が解決したのです、私にとっては。中学は弁当になったから。小学校より中学の方が良かったです。でもテストはより多くなって、順番もつくし、本当嫌でしたね。大学の最後のテストが終わるまで本当に嫌だったです。

●吉田委員
　今袋井市は日本一の給食をうたって新しいセンターとかで、おいしいのが作られていうると思うのですが、あの給食だったらどうですか。

●大場市長
　嫌いなものが入っているっていうのが給食のねえ。

●吉田委員
　例えば、テストが嫌というお話だったですが、授業そのものはどうでしたか。

●大場市長
　授業もあまり好きではなかったです。特に指されるのが。指されて前に出て説明しなさいとか、本当に嫌だった。だから、指されないように誰かが手を挙げてから３番手４番手位に手を挙げる。そういう感じでした。

●大谷委員
　市長と我々はそんなに年齢が変わらないと思いますが、いろいろと学校の巡回をさせていただいた中で、昔は机の向きがスクール形式、いわゆる先生の教壇に向いてみんな座っていたのですが、今はグループディスカッションの時間が増えていたりとか、そういう中で確かに我々の頃よりは子ども達がただ一方向でなく双方向になってきているなと思うの

ですけれども。僕個人的にはギガスクールに対する思いがあるのですが、タブレットとか使いどころがあって使わない時は使わなくても良いし、使えている子は使えている。もっと対話とか子ども達が。先生のスキルも以前よりもっと大変になっているなと思うのがすごく。子ども達が多様性の中で一人一人の評価っていうのが、子ども達の考えに対してある程度一定の評価をしたりとか、感想を言ったりとかいうのが結構皆さん一生懸命努力していて、現場ではされている中で、多分昔に比べると、先生に認めてもらったりとかいうことですごく楽しそうな。昔よりはワクワクする機会が、我々の頃よりは増えている。市長がこれからの袋井市の学校教育にこうしてほしいなというところがあれば、我々としてはそこのところに非常に思いを入れていくというところなんですけれども。

●大場市長

やっぱり双方向の授業、やりとりがある授業が良いと思うんですよね。先生が働きかけをした事に対して子ども達が自由にリアクションを言ったりとか、お友達の話を聴いたりすることができる。そういう双方向の授業がもっともっと多くなっていくと、子ども達も楽しいのではないかなあと。あと、そこで自分自身が成長している事もテストではない、リアルな成長をそこで感じることができるのではないかという気か、自己肯定感とよく言われますけれども。いろんなクラスの中でやり取りが発生する事で自分が言った事で、攻撃を受けるかもしれないけど、場合によっては評価してもらえる事もあるかもしれない。そこで自分の意見ってそういって評価されたんだっていう事で自己肯定感に繋がるという事もあるかもしれないので。確かに先生に褒めてもらう事も良いかもしれないけれども、自分の発言を友達から評価してもらう、そういう事がいろんな双方向であったり、当事者間とのやり取りが多い授業、学校が良いのかなあという感じがします。そういうのだったら、少しは楽しかったのかもしれない。スクール形式で一方的に聴く一方という授業、それで、テストされて〇だとか×だとか、やっぱり面白くなかったという気がします。

●大谷委員

今市長の学校巡回などはないですよね。年に１回とかは学校巡回とかがあった方が良いのでは。先ほどの自己有用感とか自己肯定感っていうのは子ども達だけでなくて、実は先生方も。今我々が見ていて、超ベテランの先生方がいる一方で、割と中間の先生が少ない。若い20代30代の先生が結構たくさんいらっしゃる。当然自分達の中でも評価をし合ったりとか、いろいろ研究をし合ったりとか、当然上の先輩先生方からの評価があったりとか。我々教育委員会は、どちらかというと巡回に行っても査察に来たような感じで。僕は全部の学校は難しいですが、幼稚園、小学校、中学校の各１校ずつ位見て回っていただく方が。市長がおっしゃる事はなかなかすごい有用でないかと。例えば、先生方と話をこういう形で30分とかでも良いと思うので、全部の学校は難しいんですけれども。こういうところで一生懸命頑張っていますというところを評価していただいたりとか、見ていただいたりするとか。現場の声を聴いていると、本当に予算的なものとか些末な話かもしれないですけど、すごく困っていたりとか。例えば、プールに入れる消毒薬を買うお金がないとかねというようなレベルの話でもすごい切実にみなさん思っていて。そこをどこかで傾聴してくれて、なおかつそれがやるねと言ってくれたりするだけで先生方のやる気も上がる

と。やる気が上がると、子ども達に対しても、インタラクティブに先生達もより頑張る気が出る気がするんですよね。

●教育長

今はすごく先生方も講義形式ではなくて、子どもに問いを投げかけて、子どもに考えさせて、子ども同士で会話をさせる、対話をさせて、で最終的に自分の考えをアウトプットしましょうねということを一生懸命やってくれていますので、昔ほど講義形式はないですし、今はそれなりに考える時間をとっている感じになっている。そういった意味では、多少ワクワクしている。人によって全然違いはあるので。

●大場市長

それが袋井型教育ですよね。それは素晴らしい事です。

●鈴木委員

私は学校が好きだったんです。学校って楽しいところと思っていた。私達の時代はそうだったと思うんですよ。割と自由な雰囲気で、私は前向いて授業を受けた覚えがなくて、今でも理科の実験とか、学級活動とかを思い出してきているんだけれど。今はすごい考える力というのでやっていて、考える場というのがあるんだけれども、子どもが昔と比べて変化していることは確かで。そろそろ一斉学習も限界かなあと感じるところがあって、考えさせている間にいろんな多様な子達がいる中で、学校巡回している時に、待っている時間がすごく多いところも中にはあって、そこからどんどん良い方向に行かない流れがそういうところがあって、いろんな多様な展開もあり、学校によって違うと思うし、教師によって絶対違う、教師の力量によって違うので、学校によっていろんな力量の差とか、その時の組織とかいろいろあるので、もっともっと一つ一つの学校が特色があっても良いのかなあと思いますね。そこで、校長先生に頑張ってもらって、学校づくりをしていただくのが良いかなあと。ちょっと閉塞感を感じているのと、不登校とかね、問題行動っていうのも何とかしたいなあというので、それにはもう一回原点に戻って、どうしたら子ども達が楽しいって感じるかってそうしたいなあと。確かに昔給食嫌いで学校が嫌になった子がいるんだけど、今はそれほど食べさせていないんですよね。子ども達の声を聴きながら、一人で考える時間でとても必要なんですよね。人と対話するんではなくて、自分と対話していろんな事を作り出してきた経験もあるので、そういう子も今増えてきているのかなあと思うので、そういう多様性を持ったような袋井の学校にしていくと良いかなあと思うのです。学校巡回して、この間今井小は確かに面白かった。袋井型授業プラス、その先生の個性を出していた、展開の仕方を変えていた。やっぱりそこが面白さに繋がるかなあと思います。若い先生が多くなって、いっぱいいっぱいになって、先生が楽しくなさそうな顔をしていると楽しくないかなあと感じる。いろいろな事に対応できるような学校が良いかなあと。いろんなやり方を学びたいなあと思います。

●大谷委員

お金がかかる話ですけど、でももうちょっと多分人材に余裕があるとより先生がいきいきと活動できるのかなあと。どこの学校に行ってもそれはすごくいつも切実な問題として出てくるので、そこはもうちょっと教育委員会だけではなくて、市全体として、現場として切実なる問題として必ずそこは出てくるので、先生方がやりがいを持って、もう一つは、余裕を持って教えられる環境っていうのはどういうふうに作っていったら良いかをまたこういう機会を作って、働きやすさというとなんか難しくなってしまいますけど、やりがいを感じられる先ほど市長がおっしゃっていました自己有用感、自己肯定感を子ども達だけではなくて先生方も。使いつくされているだけではなくて、自分達がやりたい、これだったら子ども達が楽しくワクワクできるなあというのをやれる、その先生の力を出せる余裕は欲しいなあと。

●大場市長

今お話しを伺っていて思い出したのは、もしかしたら一番嫌だったのは自分の話ですが、やらされているのがすごく嫌いだった。今でもそうだけどやらされているのがすごい嫌いなんですよ。だから、例えば日記が毎日課題の先生がいて、みんな書いてくるんだけどクラスで僕ともう一人だけ、僕は一年間最後の最後まで日記を出さなかったんですけど。要は書くのが、書けって言われて書くのが本当に嫌いで、やらされている感がすごい。それを少し自由にしてくれれば多分書いたと思う。好きなものだけ書いて良いよと言われれば、多分書いたと思いますね。とにかく毎日書かないといけない。毎日書いて毎日先生が添削して返すというそういうルールがすごく嫌で。

●溝口委員

確かにさっきも出ていましたけれども、僕らの頃に比べたら授業の中でみんながお互いに話す時間が増えていて、そこはワクワクかどうかとはわからないにしても、進歩しているなあと感じているんですが、一方で授業のやらされ感、先生の授業の構成に従って子ども達がやらされている感がある授業もないことはないなというふうに感じています。まあそこはもう少し自由に持たせて欲しいなというのはありますけれども。もう一方で、市長は給食は嫌だと言いましたけれども、私は給食が好きで学校に行っていたので、人によって違うんですよね。だから、ワクワクする学校というテーマを出したわりには、みんながワクワクするというのはできるのかなあと一方で感じていました。そういう中でも、最近は学校に来れないとか、学校へ来てもみんなと一緒にできないとかいう子がいるので、少なくともそういう子のところをもっとワクワク、学校へ来たい、学校に行かないといけないというところが正しいかは別としても学校に来てもらうために、この間も校長先生に言いましたが、そういう子がいる部屋をもっと芝生を敷いたり、ソファーを置いたり何か飾りをつけたり、そういう事を何かできないですかねと言ったのですけれども、そんな工夫とか。月曜日に子ども達が行きたくない子が多いのであれば、月曜日の１時間目の授業を体験学習とか、個別に自分で何かやるとか、何かちょっと子ども達が面白いそこだけでも授業ができないかとか。この間思ったのが、毎週月曜日にフッピー君が校門のところで迎えてくれるとか。一部の子だけでも良いので、そういうふうに救える手段が無いかなあと

いうのをこれから考えないといけないかなあと思っています。全員を楽しくさせるのは相当難しいだろうから。

●大場市長

やらされていたのが嫌だなあって。実はつい先日もそれを思い出したんですけど、実は社会の中でも同じような現象が起きているなあと思っていて。例えば自治会活動なんかで、自治会の役員になんてやれされるとみんなものすごく嫌がる。役を割り当てられてやるのを嫌がるんですよね。自分もそうですが。でも、好きで地域の人達が本当に地域に住んでいる仲間達同士が好きな事をやるというのは、時間とかお金とか労力とか、全然惜しまずに時間を費やすので。役を引き受けるのに嫌で困るって言っていた人達は、やれ時間が無いだ、忙しいだ、自由が無いだとかいうのが理由というが、実際はそういう時間ってあると思うんですけど、結局それってやらされ感からきているのではないかなあと。だからそういうハードルを取ってあげれば、コミュニティを維持していくっていう事も解決になるのではないかと。どうしたら良いのだろうかと、やりたい人達だけが地域活動なんかも割り当てるのではなくて、参加したい人というか、興味がある人達だけでも集まってもらえると、もしかしたら良いかも。じゃあ大日から浅羽の方へ何か手伝いに行く時もあるかもしれないし、いろいろな地域をまたがってコミュニティができると良いなあと。やらされ感を少しでも排除してあげられると社会課題の解決になるのではと。

●教育長

子ども達が、自分達で何かを作り上げていくとか、やろうとするものには相当関心というか力を注ぐと思うので、何か先生から言われてやるっていうよりは自分達で何かやります、考えますというところからやるとものすごく良い。いろんな場面でそういう事を与えてあげる事が大切かなあと思います。そこが大切かと思います。

●大谷委員

市長にも現場を見てもらうのは必要かと。袋井は教育に対して特殊な環境というか、大学もあるし、看護専門学校もあるし、高校も普通科高校と実業高校と２つあるし。ある意味全ての機関が揃っている中で、もちろん高校と大学だったりとか、それぞれの連携はあると思うのですが、そう少し強めていただくところの。よく他の自治体にもある市長のトップセールス、トップコーディネートっていうのは、市長がせっかくだから例えば学長先生とか高校の校長先生へ是非袋井の小学校とか中学校とか連携を深めてくださいよというような連携講座。講座もそうですし、もっと言ったら、交流っていうのがもう少し市長とあったりすると子ども達にとっても上級学校、例えば高校ってどんな感じって、高校っていうのは高校見学とかもありますよ、大学見学も。でもそういうことではなくて、よりそこのところって深く進みこんで行くと、その向こう側の自分達が義務教育が終わった後の先っていうのは。そういう意味では先ほどの市長がおっしゃっていました地域とどういうふうに関わらせるかというところなんですけど。そこのところっていうのはもちろんコーディネートをしてあげた後、自分達がどう選んでいくかというところの選択肢はなかなか難しい。それをやるためには、相当な市長が割と率先してそういう面において袋井の特色

のある地域性を生かしたものを、行政の執行者として力強くやっていただけるとより袋井らしさとか、未就学児にももっと良い影響がでてくるのではないかなあと。なかなか大学まである自治体は無いですからね。掛川がいくら新幹線とかがあっても大学は無くなってしまいましたからね。

●吉田委員

私の下の子もやらされるのが本当に嫌で、例えば工作はすごい好きなのに、図工でこれ作りなさいと言われるととたんに拒否するようなタイプなんですよね。そういう子が学校ってもちろん自分で考える時間も増えてきていますが、やっぱりどうしても、枠が決められている。そこの枠に入らないとなかなか生きづらいっていうような関係の中で、どうやったらうちの子が学校がワクワクするのかなあと考えた時に、例えばなんですが、名古屋の方で自由進度学習っていうのがあって、その単元の中で自分がどう学ぶかというのを自分で考えて進めていける学習とかもあるみたいで、そういう自分でコントロールできる学びを進めていけるっていう自由の裁量が大きいとちょっとワクワクできるかなあと考えていまして、神田課長はそれは教師がうまく導けば良いとおっしゃるとは思うのですけど、そう言った自分で考えてやれる時間もあるという、そういった教育になれると良いなあと思っていまして。市長はチャレンジ　アンド　スマイルというのを掲げていらっしゃるので、例えばこの学校だと試しにチャレンジする時間を作ってみないとか、率先して設置校などを作ってもらいたいと思いました。

●大場市長

具体的に例えばどういうことですか。

●吉田委員

例えば、総合の時間とかで自分が学びたいテーマをやるでも良いですし、算数の図形の面積を求めるのを自由進度学習にしてみるとか。

●大場市長

それは中学で。

●吉田委員

小学校でもやっているところはあります。名古屋はあります。そういったところへ視察に行けたら良いなあと思っていて。

●教育長

前に教育委員の皆さんへも言いましたけれども、市教委で特定の学校へあーせよこうせよとは基本的に言わない。何で言わないかというと校長が最終責任者なので、あなたがちゃんと考えてやりなさいよという話なんです。だけど、子どもの実態を考えてみて、去年どおりではなくてちゃんと自分で考えた経営をしてくださいねということを言っているので、校長先生の裁量の中でできる事はいっぱいあるのだと思います。そのためにどういう

校長先生を育てるのかが私達の仕事であって、先生方にいろいろな経験をしていただいて、もっと裁量を使ったり、ワクワクする学校づくりを目指して欲しいなということになってしまうのかなあと。まあ自由進度や教科担任制だったり、それこそ学年担任制だって良いじゃないかとか。いろいろなやり方があると思うので、そこは市教委として校長先生と話をして。一人でも多くの子がワクワクする場面があると良いなあと思っています。

●大場市長

大変貴重な御意見をありがとうございます。しばられない教育とか、そういったものの価値も話に出ました。その一方で、どこまで行っても大事なんだろうなと思うのは、ルールを守る事とか、最低限これだけはやろうねという、ある意味義務としてやらなければいけないような事をきちんとできる事がこれもまた大事だと思うのですね。そういったものをやっぱり学校でも教えなければいけない。子どもを守らなければいけないという事で、そういう事と相反するのですけれども、相反するものを如何にワクワクしながらその双方を、片方は嫌かもしれないけれども、もう片方のワクワク故に我慢できるというそういうやっぱり学校が良いんじゃないかなあと。全て自分の好きにはできない。やらなければいけない事は最低限やって、後はワクワクの時間。それが楽しみで学校へ行くみたいな。そういう関係をね。で、しかもそのワクワクが非常に大きいと。こっちは我慢するけど、こっちのために行くんだよと。そういう学校ができると良いのではないかなあという気がします。それがまた難しいのでしょうけれども。これもまた、１つ目のテーマと一緒で、みなさんと議論を重ねさせて今後もいただきながら、より良い学校教育を市として実現していかなければならないと思っています。いろいろ課題は多いですけれども、皆さんと共に良い学校作りの実現をしていくために私も頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

４　閉　会

●教育部長

どうもありがとうございました。あっという間の限られた時間の中で過ぎてまいりましたが、今日は部活動の地域移行という事で、今教育委員会として取り組んでいる既存の部活動を移行すると共に、地域の様々な子ども達の居場所を作るという事で、まだ我々も道半ばと思っていますし、委員の方々にもそういった御発言をいただきました。今後とも委員の方々の御意見をいただきながら、市として進めていく内容を充実させていきたいと思いますし、後半部分ワクワクする学校づくりでは、先ほど市長がまとめていただいたとおり、ルールを守ったりですとか、集団ですとかある一定の団体の中できちっとした中で学んでいくその厳しさですとか、ルールといったそうしたものに対して学校での特色を生かしながら、委員からは、例えば月曜日の一時間目の過ごし方ですとか、自由進度学習等々の事例をいただきましたが、こうした情報などを学校に投げる中で教育長が言っていただいたように、各学校の裁量で子ども達のワクワク感を引き出すような取り組みができるように教育委員かとして考えて行きますので、引き続きその進捗を教育委員の方々には見守っていただきたいと思います。なお、本日の総合教育会議ですが、元々の主旨として、教育委員の権限にのっている事務について、地方公共団体の長の権限との調和を図るという

目的もございますので、教育委員会として就学前から小学校、中学校、それから社会教育、それから子育てと様々が分野がありますので、また年度内にそうした教育委員会として関わって、市長部局を跨いで皆さんに御意見をいただがなければいけない部分がありましたら、臨時でも開いてですねお集りをいただきたいと思いますので、その時には是非御意見をいただきたいと思います。本日は充実した一時間半という時間でございました。本当にありがとうございました。以上で本年度一回目の総合教育会議を終了とします。ありがとうございました。

（午後３時01分閉会）